学長かわら版

TOKYO MEDICAL UNIVERSITY

第44号

発行日：2026年8月20日

編集・発行：
東京医科大学
学長企画ＰＴ

https://www.tokyo-med.ac.jp/univ/gakuchokawaraban.html

【特集】学生の多様な活躍 2026

学生の活躍

本学の学生は、建学の精神「自主自学」に基づき、研究をはじめ、社会貢献や課外活動での成果など多様な活躍をしています。ここでは、2026年前半を振り返り、学生たちのさまざまな活躍をご紹介します。

学長賞

2026年5月20日授与

医学科第６学年　永松 由衣 さん



【受賞理由】永松さんは、第1学年から分子病理学分野に通い（第2学年から「リサーチ・コース」を履修）、在学中にアセロラ由来エクソソーム様ナノ小胞を用いた研究に関する英文原著論文を筆頭著者として発表されたことが表彰されました。

タイトル： Exosome-like Nanovesicles from Acerola for CRISPR/Cas9 Ribonucleoprotein Delivery to the Central Nervous System
掲載誌名： Molecular Therapy Nucleic Acids（掲載論文はこちら）

プレスリリースも配信！

学長賞

2026年7月15日授与

医学科第６学年　白築 美結 さん



【受賞理由】白築さんは、医学教育に関する学生ネットワークの立ち上げと発展を主導し、学会での研究発表やシンポジウム・ワークショップの企画運営に尽力しました。その活動が評価され、ネットワークが「日本医学教育学会学生特別委員会」として正式に発足されました。こうした学生主体の医学教育参画の基盤を築いた功績により学長賞が贈られました。

「日本医学教育学会学生特別委員会」が正式発足

現在、全国の8大学1大学病院の学生16名と研修医1名の計17名で構成予定。その傘下の学生WGには15大学から約20名の参加が決定。

ベスト・プロフェッショナリズム賞

2026年5月20日授与

HP

宮澤学長の発案のもと、**学生たちの優れた態度や行動に光をあてる**ことを目的として、昨年度から年に1度、表彰されています。学生による推薦と大学による選考を経て、今年度は4名の学生が受賞しました。



医学科 第２学年　武光　志挺 さん
医学科 第３学年　飯島 ひかる さん
医学科 第４学年　黒田 えいみ さん
医学科 第５学年　吉村　美香 さん

2026年1月25日

社会貢献

「第23回新宿区シティハーフマラソン・区民健康マラソン」で救護ボランティア活動に参加

医学科・看護学科　学生団体DOCSの学生21名



「第23回新宿区シティハーフマラソン・区民健康マラソン」に、本学学生団体DOCSの学生21名が救護ボランティアとして参加しました。レース当日は大学病院の医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、栄養士、臨床心理士、放射線技師、事務スタッフなど68名と共に、救護ランナー・救護定点スタッフ・AED所持スタッフを担い、約15,000名の出場者が安心して完走できるよう競技運営に貢献しました。

2026年6月28日

社会貢献

「しんじゅく未来図EXPO2026」に医療体験ワークショップを出展

医学科・看護学科　学生団体DOCSの学生22名



桜美林大学学生団体unite主催の「しんじゅく未来図EXPO2026」が開催され、本学の学生団体DOCSがBLS体験ブースと聴診・ファーストエイド体験ブースの2ブースを出展しました。このイベントは、小学生や中高生、その保護者などを対象とした体験イベントで、当日はあいにくの雨にも関わらず、公式来場者数475名と多くの方の来場がありました。

■DOCSとは･･･Development of Clinical Skillsの略。臨床の現場で活きる知識や手技、コミュニケーションの取り方を学ぼうと学生達が自主的に立ち上げた団体。より実践的な医学を身につけるべく、学生向けの勉強会を定期的に行っている。



学長コラム

宮澤学長からのひとことを「学長コラム」として定期的に発信！

Vol.8　問いを立てる

医学科3年生を対象とした「医療プロフェッショナリズム」の講義後、一人の学生から質問メールが届いた。

「今の医学部教育は単なる医師の養成学校でなく、高等教育としての役割を果たせていると思いますか？」

「今の医学部教育」という表現には、私への多少の遠慮があったのかもしれない。その奥には、「東京医大は、医師になるための知識と技能を身につけるだけの場所になってはいないか」という、本学への率直な疑問が透けて見えた。

もちろん医学部には、確かな医学知識と臨床能力を備えた医師を社会に送り出す責任がある。しかし、教育基本法が大学に求めているのは、専門的能力を培うことにとどまらず、真理を探究し、新たな知を創造し、その成果を社会に還元することである。

では、高等教育としての医学教育とは何だろうか。私は、その根幹の一つに、学生が自ら問いを立て、その問いと向き合い続ける力を育むことがあると思う。

今号では、学生たちの素晴らしい活躍が紹介されている。しかし、その背景には、さまざまな「問い」がある。研究活動を続け、英文原著論文として成果を世界に発信した学生は、「生命科学において、まだ明らかになっていないことは何か」という未知への問いに向き合った。医学教育のあり方に疑問を持った学生は、「自分たちが受ける医学教育はどうあるべきか」と問い、仲間とともに学生組織を立ち上げ、日本医学教育学会で発表するまでに至った。DOCS（Development of Clinical Skills）の学生たちは、「学んだ医学を社会のためにどう生かすか」を問い、自らさまざまな社会貢献活動を展開している。

そして、昨年度創設したベスト・プロフェッショナリズム賞を受賞した4名の学生たちの姿には、「他者にどう向き合い、どう行動するのか」という、医療人としての根源的な問いがあるように思う。学友から推薦され、教職員からも評価された彼らの日々の行動は、利他と奉仕の精神が、理念として掲げるだけのものではなく、他者との関わりの中でこそ形になることを教えてくれる。

先日のオープンキャンパスの模擬講義で、本学の竹口博文医師は受験生たちに向けて、医学部で膨大な医学知識を修得したその先に目指すものは「人間の専門家」になることだ、と語った。印象深い言葉である。

AIは私たちの問いに応答し、思考を支えてくれる。しかし、何を問い、その問いを何のために追究するのかは、私たち自身に委ねられている。自ら問い、自ら考え、自ら行動する。それは、本学が創学以来大切にしてきた「自主自学」の精神そのものでもある。

冒頭の学生の問いに、私はこう答えたい。東京医大は、医師を育てる。と同時に、医学を学ぶことを通して人間を学び、自ら問いを立て、その問いと向き合い続ける人を育てる高等教育機関でありたい。そして、こうした問いを突き詰めた先には、**「自分はいかに社会のために生きるか」**という、さらに大きな問いがあるのではないだろうか。